

TS（トータル・サティスファクション）を目指して M23

「信じて待つ」技術

校長室担当より



子どもに課題が発生したときに、私たちが気を付けるべきことを卵の孵化の際の親鳥が教えてくれています。

卵は約3週間で孵化するものが多いそうです。しかし母鳥は3週間ずっと抱き続けているわけではありません。

18日目くらいには卵をくちばして突っつきます。すると母鳥の呼びかけに応じて幼鳥は中から突っつき返します。こうして殻が内側から割れて、ヒヨコがでてくるというわけですが、場合によっては突っついて何の返答もないことがあります。そんな時に、母鳥はある「行為」をします。それはどんな「行為」でしょうか？

「さらに強く突っつく」、「足を使ってひっくり返す」、でもなく、実は「待つのみ」。外側から強く突っついたり、転がしたりすると内側に向かって殻が割れるので、ヒヨコは出にくくなる。だから待つしかないのだそうです。母鳥には自分で我が子が殻を破って出てくる力があることを「信じて待つ」力があるということです。

私たち人間も同じです。外から刺激を与えることはできますが、変化は外側からではなく、内側からおこるものであるという認識が大前提です。それを「適切なタイミングで行う」ことこそが私たちに求められていることなのです。信じて待つことは。時間がかかることもあります。

「人は自分で見つけたもの以外はほとんど忘れる」とまで言われています。忘れてしまうと使うこともできません。同じ答えでも、自分で見つけるのと他人から教えられるとでは天地の差があります。生徒自身の「気づき」こそが「喜び」となり、「行動変化」のエネルギーとなることを大人が理解することが大切です。学校での支援や授業も同じです。私たち教員ができる限りの専門的なスキルをもって、生徒との対話で突っつき、彼らが「気づき」という喜びを行動へのエネルギーへ変えていくことを「信じて待つ」。これは、昨年、そして今年度もご講演いただいた暮らしの交通株式会社の田島颯様にいただいた言葉です。これはすべての学校で求められる技術だと考えています。（令和7年9月12日）